

濠州は一七八〇年に初めて英國から移民が来て、その気候風土にも耐え、だんだん人口も増加し、一九〇一年に連邦制が敷かれ英連邦内の自治国となり一九三一年に英議会の承認によつて事実上の独立国となつた若い国である。したがつて老人は少く若いばかりである。宴会等で年を聞かれ、自分は一八九二年生れだというと、わあ一九世紀だと声も上り、どうしてそんなんに長生きできるのか、その秘訣を教えると、それは「熱心に聞かれたので、初めの内は精神を樂天的に持ち、小事にこだわらず、食物は腹八分目、菜食につとめ、しかも運動をつづけなければいけないと細かに説明していましたが、何処に行つても、同じ質問ばかりなので、少々面倒になり、遂にはヤングチキンと遊ぶことなどと言葉をすべらしたが、それが却つて喝采をうけるという始末であります。



日本エヤーブレーク株式會社

取締役社長 広瀬信衛

本社 神戸市葺合区御幸通7丁目1-12
三宮ビル西館
郵便番号 651

電話 神戸(078) 251-8101(大代)

事務所・営業所 神戸・東京・名古屋・
北九州・札幌
工 場 神戸・東京・横須賀・
西神・甲南・西宮

金子直吉翁物語

（森本準一氏 落穂集より）

昭和三十六年二月七日 経協講演
本口述は去る二月七日開催した当協会総務委員会「第五回財界人を囲む会」におけるお話を整理したものです。

ただいま紹介をこうむりました日本エヤーブレークの会長森本でございます。

小野総務委員長から私の体験を話せというお言葉であります。小さい私の体験を話すよりもっとえらい人の話をした方が面白かろうと思いますので、私の尊敬しております鈴木商店の大番頭さんの金子直吉翁のことについて、ひとつ漫談的にお話をいたしたいと思います。

昨年の春兵庫新聞社で松方、金子物語という本を出されております。その本は神戸の実業界が生んだえらい二人の生涯のこと、その外について非常に面白く書いています。私は鈴木商店に入りましたのが大正十二年の関東大震災当日であります。鈴木商店が破綻した昭和二年までお世話になつて、その後神戸製鋼所に移りまして、昭和三年から昭和十九年七十九歳でなくなられるまで、しばしばお目にかかる金子さんのお話を伺つたのであります。それで「松方、金子物語」に書いてないことも加えて皆さんのお耳に入れたいと思います。

一、金子直吉翁のユーモア

金子さんは人物も識見も非常にすぐれた方であります。いろんなことをなされておりました。一面にまた非常に話上手でユーモアに富んだ方であります。ユーモアに富んだお話を一つ二つしますと、金子さんは非常に大食をされる方で、宴会とか、あるいは一緒にいます。

鈴木商店が非常に盛んな時代、これは第一次大戦が始まつて後のことであります。鈴木商店が支配しておる会社が五十いくつありました。そうして取り引き高は優に三井、三菱と比肩できるところまでいつておつたのであります。一九一八年に休戦条約ができるからだんだん左前になり、昭和二年の二月に鈴木商店が破綻の憂目にあつたのであります。この時私は経理第一部長という名前をもらつておつたのですが、実際の経理は大塚清一君が経理の第二部長、そうして現在、三菱レーヨン社長の賀集君が課長をやつております。

御会食・御宴会

ビフテキとすき焼

和室宴会 300名様迄
洋式宴会 500名様迄

スエヒロ

銀座店 銀座6丁目松坂屋裏
TEL 03-571-9271(代)

築地店 築地4丁目銀座東急ホテル向側
TEL 03-542-3951(代)

あなたの
英語診断辞書
—英語における日本人共通の誤り—

101 東京都千代田区
神田錦町3-12 北星堂書店 振替東京8-16024
Tel. (294) 3301

松本 安弘 共著
松本 アイリン 上製・函入
B6・1,020頁 3,000円
送 料 200円

総見出し索引付(2,100項目)
画期的な辞書!
日本人の一般英語学習者や
実務家がおかしやすい共通
の誤りの実例を集めて、見やすい、
分りやすい、利用しやすい辞書形式にまとめた本。
学生は勿論、大学受験生、実務家必読の辞書!

松本 安弘(土井株式会社・社長)
松本 アイリン(故 土井内蔵・長女)

りました。その時台湾銀行が鈴木商店に融資した額が三億五千万円。その時の日銀券の発行高は十二億にたりないと思つております。今日、日銀券発行高は一兆円、多い時には一兆二千億円というような額にのぼつておりますから、その三億五千万円を今日の額に直しますと二千億円以上になつておると思います。当時台湾銀行の払込済資金はいろんな政治的事情もありました。とにかく四千五百万円というような資金で、しかも非常に預金の少ない台湾銀行が一社に対し三億五千万円もの融資をするということは、まことに無理なことあります。台湾銀行が遂に破綻をきたしたのも、これは当然のなり行きといわざるを得ないのであります。台湾銀行がなぜそんなにやつたか。政治的事情もあると申しましたが、その時に聞いておりましたのは、大正天皇ご不例の際に日本の財界に大動揺を起すようなことがあつては相すまんから、とにかくつないで行けというような話で、一銀行のやるべきことではない、銀行業務の範囲を逸脱しておるというような議論が沸騰しまして、銀行の内部も非常にもめたのであります。遂にこういうことをやらざるを得なくなつたわけであります。

三、翁の尊敬する人

大体、鈴木商店のことはそれぐらいにいたしまして、金子さんといふ人はどういう人物が好きであつたかと申しますと、金子さんが私は、南北朝以後群雄割拠時代を通じて足利尊氏が一番えらいようと思う。というのは新田義貞に京都で破れて、たくさんの捕虜を出し、自分は身をもつて九州にのがれたのであるが、その尊氏はたちまち九州から数万の兵をひきいて、海、陸両方から兵庫に押し寄せてきた。関東の方は源氏の支配下にありましたが、九州の方面はそういう縁の深いところではなかつた。尊氏が九州の方へ行つて、たちまちのうちにそういうたくさんの味方を作り得たということは、尊氏が当時としては非常に経済に通じておつた。また身を持つことがかたくて、論功行賞に当を得たことに帰すると思う。それから近ごろでは杉山茂丸という人がおるが、これがまたえらい。この人は朝

少なくなる。買手が少なくなれば生産が減つてくる。生産が減れば失業者が増えてくる。失業者が増えてると社会は不安になる。反対に金利が下がれば生産費は安くなる。生産費が安くなれば物価は下がる。物価が下がれば買手が増える。買手が増えれば生産は上がる。生産が上がれば失業者は少なくなる。失業者が少なくなれば國家は安泰だ。だから速かに金利は引き下げなければならんという結論であります。立案當時金子さんはそれを神戸大学へ行つて、先生方を集めてこの論を強調しようと思つておるとのお話をしましたが、金子さんの講演会は遂に開かれませんでした。その後私は大学のある先生に、金子さんのこういうことを書いておられるが、あなたはどう思いますかといつたら、面白いですよ、面白いですが論理の飛躍があります。といつておられた。その時に金利はおおよそ二銭八厘から三銭ぐらいでありますから、三億五千万円借りておれば年に三千五百万円、三千五百萬円というと一ヵ月に大まかに見て三百万円、毎日、土曜でも日曜でも祭日でも十万円の金利がかかるわけでありますから、川崎も鈴木もその負担に堪えられなかつた。利益はそれだけ上がるものではありません。今日の金に直しますと、銀行券の発行高は約一千億になつておるのでありますから、今日の物価指数に直しましたら大変なものになります。

五、実現をみなかつた大構想

次に金子さんがどんなに大きな考えを持つておられたかということをお話し申し上げましよう。戦争中のことでありましたが、神戸製鋼で高炉を設けようというのでその敷地を物色してこいといふことで、私は金子さんのところへまいり、今度製鋼所で製鉄工場をこしらえたいということで敷地を物色しようと思うが、どこがいいでしょうかかと質問いたしましたら、金子さんは、それは結構な話だと直ぐ立ち上がり、部屋に掲げてある日本の地図を指しながら、土地としては瀬戸内海の沿岸がいいだろう。西の方からいうと長府がいい。長府には三十万坪ばかり鈴木商店が埋立ての権利を持つておりました。その次は三田尻がいいだろう。それから東へ行つて徳山

鮮の併合を画策実現した陰の人である。寺内さんの参謀になつて、あの日韓合併を実現したまことにえらい人であつた。また日本産業發展のためには興業銀行の設立が急務であることを提唱しその実現を図つたがその規模が杉山の計画の十分の一にも足りない小規模に縮小せられて中途半端のものになつたのは残念である。この杉山が、このごろ金子は少しもこないじやないかといつてゐるといふような話がどこからともなく伝わつてくるので、どうしてもご機嫌伺いに行かざるを得ないようになる。ご機嫌伺いに行く時には手みやげを持って行かなければならん。またしばらくたつと、このごろ金子は少しもこないじやないかといつてゐるといふことがどこからか伝わつてきて、また行く。また手みやげを持って行く。そういうことを何回も繰り返しても一回もお札をいつたことがない。この人には實にえらい。私にはこわい人です。こういつておられましたが、あの金子さんが、えらい、こわいという言葉を使われるのはめつたことの何回も繰り返しても一回もお札をいつたことがない。この人は實にえらかつたのではないかと思います。金子さんはそういう人物評論を私になさいました。

四、経済野話

また金子さんの経済論の一端を申し上げますと、金子さんの談話を、ただいま呉造船所の社長をしております住田君が筆記したのであります。経済野話という本があります。や話というのは大体何何夜話とかいつて夜の話を書くのが普通であります。や話というのは大体何なぜ「野」という字を使つたんですかときくと、それは野人が話すということを何回も繰り返しても一回もお札をいつたことがない。この人には金利を下げてもらわなければやりきれんというので、松方さんと金子さんが相談をされて作られたものであります。その金利引き下げ論というのがあります。ちょうど松方さんと金子さんは金利を下げてもらわなければやりきれんというので、松方さんと金子さんが相談をされて作られたものであります。金利が高いと生産費が高くなる。生産費が高くなれば物価は上がる。物価が上がれば買手が

がいい。徳山は海が深いから大きな船が入る。それから東の方では柳井。柳井にも鈴木商店が埋立権を持つておつた。それから東は岩国がいい。その次は広島県の太田川の下流がよろしい。それから岡山県に入つては児島半島にいいところがある。それから岡山県と兵庫県の境にいいところがある。それから東は相生の造船所がある。それからさらに東は飾磨がいいぞ。さらに東へ行くと三菱さんと川崎さんがナワを張つておられるから、その辺は手が付けられんが、それから堺の方、和歌山にもいいところがある。瀬戸内海では大体そのぐらいだ。四国、九州へ海を渡つて行くということは大変なことだからこの次だ。しいて求めれば四国には西条がある。九州には茹田がある。まあそのぐらいで、これは皆自分の方で調べたんだけれども、神戸製鋼でも早くそいつを調べてそれらの土地は皆買うときなさいといわれた。神戸製鋼の力を考えて、金子さんのいわれることを考えあわせると、あまりに大き過ぎて、私は茫然としたことがあります。金子さんはそういうような人でした。さらに抱負の大きいことを申しますと、金子さんは満州の開拓には、ウスリーの大大きな河の水を日本海へ流すのは惜しい。奉天からこの河の水をとつて運河をつくり営口の方へやれば、灌がい用の水は十分にあるし、非常に便利になつてくる。そういう考えも持つておられた。また北支の方では天津から塘口まで運河を造つてはどうか。なお国内では尼崎から大阪市の中間に向つて運河を掘つたらよろしい。いま船はずつと大回りをして大阪の方へ入つて。これをまつぱづで実際に車が輻輳しておつて、時間のかかることおびただしいのであります。来年度になつたらまだひどくなります。さらに将来播州に工業地帯ができました時には、播州の方面から大阪まで大きな

荷物をどんどん運ばなければならん時代がきました。どうしてやつたらしいか。金子さんが運河の計画をいつておられたのは、いまから三十年も前の話であります。その時にもしでてきておつたならば、これはあの交通を緩和することおびただしい。先見の明がありますと、金子さんの構想は遂に実現しなかつたのであります。ですが、これは私、どうしても大阪と西の海の方と、近い将来、海上トラックというようなものを設けて播州の方面、神戸の方面から、小さい非常に能率のいい、トラックに代るような五百トン内外の船をたくさん造つて運ばなければさきがつかないというような時代がくるんじやないか。今日大阪へ持つて行くのは大回りをしなければなりませんけれど、これだけの静かな海があるのでありますから、海を利用するということが遠からず実現することだと思います。運河がないということは、運賃の点からいいましてもはなはだ惜しいと思うのであります。金子さんは常にそういう大きな考えを持つて、いろいろ研究をしておられました。金子さんの考え方されたことが極くわずかしか実現しなかつたことは、非常に残念に思うわけであります。

六 日本の危機論

また金子さんがやられたことで、皆さんのご記憶にもあると思う
のであります、戦争中に船鉄の交換ということをやりました。そ
れは第一次世界大戦で日本はイギリスに兵士を送りこら、アフリカもイギリス

七 樺腦專売制を建言

されば船は二トン以上できる。そういう契約ができまして、日本の産業は救われたのであります。この船鉄交換契約について面白いことが一つあります。それはいよいよ交換契約の調印ということになりますて、まさに調印の準備にかかる時に、金子さんが突然向うの大使に、政府との契約に保証人を立ててくれといいだしました。当時のアメリカ大使はモーリスという人であります。この人はアメリカで弁護士をやっておつて、いろいろ財界の事情なんかにも通じておられたそうであります。大使も大変困りましたけれども、この契約はどうしても成立させなければいけないというので、金子さんに、だれを保証人に立てたらいいのかといったら、ナショナル・シティ・バンクを保証人に立ててもらいたいというので、大使は本国へ要請をしまして、とうとうナショナル・シティ・バンクを保証人に立てた。金子さんのいい分は、政府との契約ではお役人が代われば方針も変わつてくる。だから民間の保証人を立てて貰いたい。民間のものは代わらないから安心だというので、政府との契約に、遂にナショナル・シティ・バンクを保証人に立てたのです。外交交渉もいろいろあります。外交交渉もいろいろあります。政府の契約に民間の保証人を立てるということは、おそらくは空前のことであななかと思うのであります。

ます。

八、功罪相半ばす

それから鈴木商店がつぶれたあとに、東京へまいりましたら、あ
るえらい人が私に、鈴木商店がつぶれたというけれども、金子がや
つた仕事は永遠に残っているよ。金子君ももつて瞑すべしだねと言
われました。それでそのまま率直に金子さんに申しましたら、金子
さんは、世の中には功罪相半ばすということがある。明治、大正の
産業革命は、第一に発動機の発達、第二は人造纖維の発明、第三番
目には肥料の変革から起つた。この発動機の発達ということは、今
日からいえばスピード時代に入つたということ。スピード時代に入
つたということは発動機が発達したからだ。これは神戸製鋼所でや
らしておる。人造纖維の発明とは、人絹であります。これは帝国人
絹。肥料の変革ということはクロード式窒素肥料製造のことである。
この三つはいづれも鈴木商店が先鞭をつけた故に明治、大正の産業
革命は、源を鈴木商店に発しておるといつても過言ではない。しか
し、それがためにいろいろ失業者が出ておるが、発動機の発達によ
つて人力車はなくなる。小さい舟も製造しなくなる。人絹の発達に
よつて天然絹糸の価格は下がつてきた。養蚕、製糸業者はそれがた
めに倒産をしてきた。窒素肥料ができたために農家は助かつておる
けれども、その他のニシンとか何とかいうような、いろんないま
までの肥料をやつておつたものは、それがために失業者、倒産者も出
る。鈴木商店がやつた功罪については、後世史家の判断に待つ外な
い。こういうようなお話でございました。こういうようにいろんな
仕事を考案し、いろんな仕事を実施されて、大変に日本に功績を残
された人であります、一面にはいまいつたように罪を作つたとい
うようなこともあるというお話をなさつたこともありました。

なる話が多いからお話し願えませんかと、そんなことを話すと差しさわりがある。現に神戸製鋼所の三十年史に載せた話も半分以上削つてしまつた。田宮さんが、こんなことを載せたら神戸製鋼所は困る、といつて削つてしまつた。だから生きている人に関係あることは、わしは話さない。いや、そんなことはいわないで、あんたがいわれたことはあんたのお目にかけてから、一ヶ月分ぐらいたゞつ雑誌に載せて、みんなの参考にしたいからということで、話が纏まり、準備でき次第、私の方に速記者がおりますし、私自身も一週間に二時間ぐらいは、あなたのところへくるからよろしく、ということでありましたが、その後金子さんがけがをされまして、それなりになつてしまつました。今日鈴木商店興亡史というものが金子さんの口から聞けないことは、非常に残念なことであります。それがもし、金子さんの口から聞けたら大変面白い、われわれの参考になることが多いと思うのであります。大体このぐらいなことで私のお話しを終ります。

金子さんは非常に話の上手な人でありますから、鈴木商店継承の
ことについて、あなたから直接、鈴木商店興亡史というようなもの
をお話しくださるならば、政治家も銀行家も経営者も非常に参考に

九、世に出なかつた興亡史

から石炭とか材木とか、いろんなことを調べ上げて、一応計算して、その当時の金で、二億とか三億とかいう結果をお出しになつた。ところがとてもじやない。そんな金で買うだけの力が日本政府にありませんので、それきりになつたという話がありますが、二、三億で北樺太を買っておつたら、えらいことになつておつたと思うのですが、それだけに非常に研究、調査を緻密にやられたようですね。田宮さんかだれかに聞きましたが、それぐらいの勉強をしておらなければいかんということをいわれました。

質問＝そういう方がおられて、鈴木のような大きな会社であつてもやはり時勢というんですか。そういうような会社がつぶれるというのは……。

さんが、神戸から高知へきて演説をされた。それを聞きに行つたところが大したことなかつた。それでわしでも仕事ができると思つて出てきた。そして鈴木商店に紹介する人があつたから入つた。こういう話でした。小さいころから非常に苦労された。職業に貴賤はありませんけれども、今日でいえばあんまり自慢できるような商売じやないようなことも、若い時にやられたようですね。

質問＝鈴木商店はつぶれたけれども、事業は残っていますね。

答＝日沙商会も鈴木さんがやられたんですね。

質問＝大正七、八年でしたか、米騒動で鈴木が焼き打ちになつて燃えたことを覚えておるんですが、あの当時としては鈴木商店は何かやつておつたんですか。

答＝私は金子さんを知つたのは大正十二年の震災後ですから、それ以前のことはあんまり知りません。時々話を聞いた程度です。私は金子さんが五十七、八ぐらいの時から知つてゐるわけです。大正七年の例の米騒動の時はよく知らんが、大体金子さんの話では、あれは世間が誤解したんだ。日本に米ができ過ぎて米価が下がつた時のことになりますけれども、大隈内閣から何とかいい方法はないだろうかと相談がありました。それにはいい方法がありますよと答えられたので、米を取り扱う商人に鈴木商店が指定された。余つた時は支店網を利用して、大量の米を海外へ出して日本の米価を調節する。ない時には外国から買い入れて値段を安くする、ということです。指定商人になつた。大正七年の時には米が不作というので、朝鮮米を輸入しようとして買ひ込んだ。日本米を買ひ占めたんぢやない。朝鮮米を買ひ占めて日本へ持つてこようという時に、米が高くなつたのは、鈴木商店が買ひ占めたんだということをいいふらすものがあつて、ああいう騒動を起こしたんだ。反対ですよといつておられました。

大変とりとめのない話をご静聴ありがとうございました。

いろ事情はありましょうけれども、鈴木商店の破綻の原因を一言にして話してくださいと金子さんに頼んだ。金子さんがいわれるのはそれは非常に景気がよくて、松方さんがロンドンへ行つた時に、毎日毎日欧洲大陸の物価が上がって、インフレがどんどん拡大していくよ。イギリスでも物価がどんどん上がって行く。これは国際経済の点からいって、日本がひとり国外に立つということはあり得ないというので、松方さんと僕は、金を借りて物に換えておけば間違いない、そういうふうに考えて松方さんと僕とは、金を借りるだけ借りてものに換えておつた。ところがその時に、安田善次郎という人がおつて日本銀行の監事をしておりましたが、自分と松方さんが金を借りておる時に、安田善次郎さんは支店長会議を開いて、インフレがどんどんきよる。ものを処分するのはこの際だ。だから担保物件はふんどしまで処分して金に換えておけ。こういつて訓辞をされた。それで松方さんと自分は、あんなえらい人でも年をとると時勢がわからない、といつて二人が笑つた。ところが二年たつたら今日はどうです。松方さんもわしも一文無しになつてしまつた。ところが安田銀行は隆々として栄えている。松方さんとわしは、そんな話を二年前にしたが、今日汗顏の至りに堪えない、とこういつておられた。破綻の原因といえば、インフレが際限なくくるから、金を物に換えておけばいいというのでやつたことが原因だ。私は、インフレがくるからできるだけ物に換えておけということを、支店長に受けてまねをする。金を物に換えるといつても、その時には普通の商品は少ない。だから何に換えたかというと、不動産程度のものしかなかつた。終戦後それはどうかというと、工場の仕事は減る。し

かし人を直ぐやめさすわけにはいかん。仕事はないにもかかわらず、管理費は依然としてかかる。これが損失の原因だ。処分をしようとしても買ひ手がない。これが鈴木商店が破綻をした大きな原因だ。こういうわけです。金子さんが話をされた中に、いい漏らしましたけれども、破綻をする前、やっぱり今日のようにゴルフが盛んに行なわれておつた。金子さんはゴルフ嫌い。金子さんはそれを風刺されて「世の中に、鬼の耳かきなかりせば、仕事能率、倍加するらん」（笑い）クラブのことを鬼の耳かきといわれたのですが、あれでなかなか俳句がうまいのです。一九一八年休戦条約ができると、一九年に鈴木商店が、ものが下がつて金繰りに困つた時に、東京のステーションホテルで善後策を講ずるために、支店長や幹部の連中が集まつて、ステーションホテルの一一号室は、金子さんがいつも借りておられる独占の部屋でしたが、その時に、みんな心配顔をしておる時に金子さんは「背水の陣屋をかこむ桜かな」の一句をものしその場の緊張をほぐされた。ちょうど桜の時分でしたが、窓から見ると桜が咲いておる。みんなが集まって心配顔をしておる時に、余裕があるといえば余裕があるんですね。鈴木商店が破綻をしたのは昭和二年ですが、昭和元年、それはトラの年ですが、つぶれる前年です。その正月に私は金子さんのところへ年頭の挨拶に行つたところがあわてたふうをして椋野（金子さんの秘書）が大変なことをした。それは私が年頭の所感に「借金をふみ倒すなよ、トラの春」といつたところが、椋野が「借金をふみ倒そうか、トラの春」と書いた。世間に伝わつたら大変だ。誤解のないようにといわれた金子さんはそういうわれたけれども、どつちがどうだか。今日まで疑問に思つております。

金子さんの話

手腕をもって活躍し、一時は鈴木商店を三井、三菱と並ぶまでに発展させた。今日わが国産業界の重鎮神戸製鋼、帝人、石川島、播磨、日商などはいづれも鈴木商店によって育てられた。

私は金子さんと安東君とに連れられてよく食事に出た。昼は向い側の中華料理、夜は県厅裏の「たからや」に行くことが多かつた。食事中、話上手の金子さんからいろいろ面白い世間話や冗談をよく聞いたものである。

心気転換の方法
金子さんは随分多忙で心労の多いお人であつたが別にこれという運動もせずお酒を飲んで遊ばれるようなこともなかつたので、どうして心気転換をされますかと尋ねたところ、それは愉快な夢を見る

「今度はかくかくの仕事を始めよう。始めてみると大変うまくて立派に五十万、百万両と儲かつた。さらに百万両を投資して新しい仕事を起す。これも非常に順調に運んで四百万、五百万両の利益が出た。またこれを投資して新しい仕事をふやす。するとわずかの間に千万両儲かつた。愉快で、愉快でたまらなくなつて飛び上つたら目が覚めた。

大塚君が側にいて百万両の借入れはまだ話ができませんというの
で、アラッ今儲けたのは夢だったのかと気がつく。
まあそんな風に愉快な夢を見ることが一番私の心気転換になる

注=金子さん 金子直吉氏 鈴木商店の大番頭として、非凡な経営